

※以下は、本書内容の一部であり、無断転載等を禁止します。
ウェブ閲覧用ですので、体裁など、実際の書籍とは異なる部分があります。

詩集「ユリウス暦の農閑期に」

佐久間紀次

目次

あふたつの手を	6
さよならジャコブ	7
dessein	8
Berlin	9
non art	11
低く重く	13
リフレイン	14
闇と同じ速さで	15
時は	16
影	18
声	19
重力	21
連中	22
狂人	23
岩肌	24
散花	25
Q J	26
調べ	28
肌	29
掃除	30
描写	32
植樹	33
水のかたち	34
きみは人ではない	36
間歌泉	39
生物として	42
ゆがんだ重力の方向に	44
テーゼ	46
背教のアテナ	47
たとえば	53
睡蓮	55
げんし	56

処理場から 58
正座して 60
豆腐 62
エラヒレオヒレ 64
銀眉ゴカンの祭祀はつづく 67
避難訓練 69
惑星 71
放物線 72
海のレミアスア 81
乾きの海流 82
貝がら 92
冬の窓 93
ユリウス暦の農閑期に 95
紗 98
猫影 101
路面線 102
ポエジー 103
腹話術師の黒かばん 104

ネットの丘 105
ギオン 107
ルイン禁漁区 110
撃の葦 112
雫 113
UNDERCURRENT 115
へいく 118
イチヨウの絵 119
的 121
合奏 122
暗室でなら判明するだろう 123
初夏の日 126
入院 128
ツウエルイ 129
椅子紳士 130
湖 132
上天気 133
ひとつの空想 134

時は

べに色したかげろうのように

公園に舞いあがってた

そして夕日はまぶしすぎた

ひび割れた指輪をみつめて

私のつま先がそれを蹴って

かすかないらだちと

鳥たちが足もとからとび去ったあとの

あいもかわらぬ虚ろさで

いいかげんどうにかならないかね

時は薄情な波のように

無限の単調で

時は

うす藍色した液体のように

透明に充満してた

残光のくれる安らぎは

恐いくらい空っぽな

昨日もなく今日もなく

明日などは決してなかった

時は時間ではなく

今日はきょうも終わらず

今日もあの詩をつぶやいて

もやの中をさまよって

あなたは今日も

ひこうき雲をみつけた

調べ

きみはくりかえし

そこらじゅう毒をまきちらし

そうして沈まりかえった

この優美な調べに

かれらはおちつきをとりもどし

きみの聖なるくちぶえを

ろっ骨の奥まで浸透させ

安堵の涙をくれるだろう

その優美な調べが

きみが思いついた

あらたな一切の序曲とも知らず

乾きの海流（抜粋）

神聖な食卓はまわり

器の精たちが

水滴にくちづけした

のどを冷やす発泡酒と

燭台が伝えるゆらぎに

褐色の微風のはこぶ

仕切られた野生の嘆鳴も

アスファルトのうえで角質化するしかない

湿りの海

空白にも意味があるという

私のみえすいた憂鬱だ

茎のスープのうえを旋回する胞子

琴のワルツ

楽隊を歌わせた指揮者こそ忘れられない

遊泳と触感

立体迷宮

式部あわせ

極彩色にはよわいのです

騒宴をのがれて

壁面の冷氣だけが抑えた

削げ落ちてゆく界限の喧騒と

行き急ぐ人々のかすんでゆく水溶液

待たなくてはいけないと

熱にうなされもがく

病人にあたえられるリング水

もしそれを失えば

悟るしかないだろう

すでに終わってしまったている

時代の不安などどうでもいい

(後略)

冬の窓

ご自分の血をご覧なさい、日差しの下で

調度品のまえにすべきは

床板にしみついた

風景に消えた黒い羽の

振音の断片を薄く削りとり

蝶の形のまま窓外の充満へと放つてやること

インスタントコーヒー一杯もって

にが笑いすすりながら

階下から冷気のなかを泳ぎ還ってくる

そのあいだに

引越しの朝に

毒莓の紅は錆色に乾く、蛍光灯の下で
鱗粉をまき散らそうと還つてくる

その目前に

閉ざされていた冬の窓は羽撃く

暗室でなら判明するだろう

何に対するためらいで

邪気の鳥が低くゆく

猫がつよく噛んでしまったさなぎに

懺悔するという行為の罪深さ

おおこわい

心臓はかるやかに止まるかと思われた

くわえ煙草の老婆の薄目

灰白い視線は私に定着していたんだ

私達の血はちがう

暗室でなら判明するだろう

アザミ色に蛍光して

でもけして七色ではない、虹も

断言した者の顔こそ蒼い

セロハンのうえでおどる

しろっぱい緑色のキズ

肩を冷やし

毛布にくるまつてなめらかな肌を確かめたい

列車と影の競争をながめていた車窓

際限なく蠢いていた小さな溟濛

ハレーシヨン

白色灯を這う微虫の幻視

午後を遣り過ぎた初夏日の酸味

高窓からながれこんでくる薄絹で

日除けの傘でもつくろうか

帰化植物のおしべ胞子お手本に

器用に金小手を使いこなし

オレンジ主翼の断面図

ラフィアオルガンのまわりに

飾り戸の粗目のむこうにある風と木陰と

海の怖い子らをあつめよう

風船をあげよう

ユリウス暦の農閑期に

1988年12月10日発行

著者 佐久間紀次

発行所 沖積舎